第四十回富山県中学生水の作文コンクール入賞作品講評

委員　浜谷尚生
伊藤勢津子
佐々禮子

総評

今年度の応募総数は９７編と例年に比べて激減しました。校内審査を経て寄せられたのは２１編。応募校は３校でした。昨年度も述べたことですが、県内から二つの名水１００選に８か所選ばれ、それも広い範囲に分布していることや、それに限らず日常、生活や産業、健康安全など水に関する話題に事欠かないことを思うと、より広い地域からの多彩な応募が待たれます。

今年の元日能登を中心に広く大地震が襲い、半年を過ぎても復旧にはほど遠い状況です。中でも上下水道の被害と断水により日常生活はもちろん、医療や産業などに深刻な影響が続いています。今回の応募作品のほとんどがこの災害に触れていたのは当然の成り行きでした。

ニュースや特集番組に映し出される給水車の姿。上下水道の復旧工事の状況などを目の当たりにして、日頃当たり前のことと考えていた水の存在が、決して当たり前のことではなかったという記述が多くの作品に共通していました。さらに自分たちの日常、さらに世界の実情をまずみんなが知ることだと結ぶ作品が目立ちました。事実、無関心からは何も生まれないのです。

優秀賞（三編）

世界の水を守るために

黒部市立清明中学校二年　川幅（かわはば）　颯人（はやと）

黒部に住んでこれまで水のことなど特別意識さえしなかったという言葉は、総評にも述べたように多くの作品にみられます。川幅さんが初めて水について関心をもち、ネットで調べたのはインドに滞在した経験からでした。その結果、水の抱える問題について幾つかの大切なポイント、例えば地球温暖化による干ばつや洪水、人口増加と需要量の増加、産業の発達が生む水の汚染などをしっかり捉えています。

調べるということは、事柄の中から、自分が納得し大切だと思うことを抜き出しまとめるという活動です。受け取るだけにとどまらない能動的、創造的な働きなのです。

次に、自分たちに何ができるかについても具体例を挙げて述べ、実践したいと願っています。関係団体への募金をしたことも、何かしたいという本気度の表れでした。ユニセフの訴えにもあるように、そのお金は

水のない地域の井戸掘りなどに役立っているはずです。意識を持ち、行動に移す大切さを述べていますが、確かにどんな高遠な思想も行動につながらなければ意味がありません。

おいしい水を全国そして世界へ

黒部市立清明中学校二年　辻（つじ）　笑花（にこな）

まず黒部の水のおいしさについて北アルプスの雪解け水であること、それが地層にしみこみミネラルをバランスよく蓄えること、またダムによって蓄えられることなどおいしさの理由を述べています。なるほどそういうことなのかと納得します。

話題は一転、能登で起こった大地震に移ります。富山県でも起きた長期間の断水、それがどんなに大変なことかそれまでさほど意識することがなかったのが、改めて水の大切さに気づきました。

自分たちは歯磨きや風呂で出しっぱなし、それに対して世界では茶色く濁った水しか利用できない人たちがいる。そういえばテレビでいろんな国の川が映し出されるのを見るけれど、ほとんど泥水のようだったりドンヨリ濁っていたりして、日本のような清流はごく珍しい。地図で川が青い線で表されるのは、日本ならではのことだと聞いたことがあります。私たちができることとしてトイレ、調理器具、石けんや洗剤の使い方など具体的に挙げました。さらにその意味も考えています。国連や政府の役割も大切だけれど、個人にできる大切なことも多いはずですね。

水を誇れる黒部であり続けるために

黒部市立清明中学校二年　長井（ながい）　悠花（はるか）

長井さんが黒部に美しい水が豊富だと改めて感じたのは、東京に住む大学生のお姉さんのところで過ごしたことからでした。人は、自分にとっては当たり前になっていることが、日常と違った環境に置かれたとき初めてそれが特殊なことだったのだと気づくことが多いのですね。富山県に住む私たちはペットボトルのミネラルウォーターが日常の飲み水として当たり前なんて考えもしません。

お父さんが魚の研究をしていて、よく一緒に出かけたことも貴重な経験でした。汚れた水は人間だけでなく魚の生育などほかの動物にも影響を与えるというのは考えてみれば当然のことだけれど、それともお父さんの指摘、さらに長井さんの記述があって改めて思い当たるのです。川の浄化で戻ってきた魚や蛍の再生、魚が飲み込むマイクロチップのこと、古くは水俣病を引き起こした汚染水のことなどを思い浮かべる人も多いでしょう。宇奈月温泉駅から見た立山を黒部の水の源泉として眺め、その恩恵に感謝する気持ちが生まれたことで長井さんの心がさらに豊かになりました。

入賞（五編）

清水と私たち

黒部市立清明中学校二年　石坂（いしざか）　清（さや）

清明中学校の作品で清水を多いけれど、中でも石坂さんの作品がとくに際立っているのは、清水を様々な視点から取り上げ、それを具体的な事実で説明していることです。例えば、美味しい水の条件として冷たくてミネラルが豊富なことを挙げます。また数多い生地の清水でも少しずつ味やにおい、硬度が違うことに触れ、水団子や名水ポーク、メダカやアメンボのことなどにも話題を広げます。それらの多彩な視点から、生地の清水のイメージが鮮やかになってきます。ただ「美味しい」「きれいな水に恵まれて幸せ」という表現にとどまる文章と比べると違いは明らかです。またそこが人々の憩いの場になっていることも忘れません。

水の作文が対象とする範囲は広く、このテーマは決して広くはない。しかし黒部の清水のことに絞ったことで意図の明確な作品になりました。

当たり前じゃない水の存在

黒部市立清明中学校二年　稲留（いなどめ）　心優（こころ）

稲留さんも、黒部で清水と呼ばれてきた湧水があり、それが生活の場でふんだんに使われてきたことから書き起こしました。それに対して、世界に目を向けると安全に水を飲めない人が多数いることを数字や割合で示しています。池や川、整備されていない井戸に頼るしかない人などさまざまな例を知る中で、改めて水の大切さを実感したのですね。さらにその思いが身近になったのが能登半島の地震でした。「辛さがすべてわかるわけではない」という言葉は、それほど想像を超えた悲惨なものだったということを伝えていて、返って効果的な表現になったと思います。

歯磨きはコップの水で、トイレの水は大小使い分けて、など些細な行動の積み重ねをと訴えて結びますが、世界中に水があることを当たり前にする方策とはほど遠い。この作文に取り組む人たちの共通の悩みかもしれません。

水があるのは当たり前？

小矢部市立津沢中学校三年　出村（でむら）　晴菜（はな）

出村さんの言葉通り能登を襲った大地震では富山県でも大きな被害をもたらしました。最初に「トイレの水流してないのは誰！」という生の言葉が生きています。その後トイレも夕食の準備にも不便が重なったことや、濁っていた水もきれいになったという状況を述べますが、ただの説明だけだったら強烈に響かなかったでしょう。

そして幸いそれほどでもなかった自宅の被害と対比するからこそ、それが長期間続く能登の人たちの大変さが身に迫るのです。そのことから出村さんは世界にも視野を広げ、水を手に入れることが難しい国があることや、汚れた水で命を落とす人もいる事実を知り、自分たちにできることはないか考えました。友だちに話しても知らなかったり、関心がなかったりする者が多く「取り組むためにはまず知らないと」と結びます。この作文への取り組みが、一つの出来事からそれにつながる事柄に視野を広げ、考えを深めるいい機会になったと思います。

限りある水源

黒部市立清明中学校二年　福山（ふくやま）　博也（ひろや）

「黒部にはちょっと自慢できることがある。水のことだ」という書き出しは効果的で、読み手を引きつけます。さらに「飛行機で配られる水に黒部の水が」という言葉はそうだったのかと読み手を驚かせ、一つの小さな例が大きな効果を上げました。文中には、これも３８０リットル、８０億４０００万人、1兆７２１６リットルなど度肝を抜くような数字を多用していて、ほんとにそうなら世界から水が消える日も、という意見もありえないことではないと思わせてしまいます。

全文が読み手を意識して話しかける口調が多く、能登半島地震と断水についての記述での「思い出してほしい」という言葉など読み手は筆者を身近に感じます。栃木からの帰り道、「初めて見た、給水車という車を」という倒置表現も効果的だし、点景の挿入で読み手の心にイメージが広がります。「文は人なり」といいます。この文章を読んで福山さんは人の心をつかむのがうまい人だなと思いました。

水をコントロールする

黒部市立清明中学校二年　渡邊（わたなべ）　央亮（おうすけ）

小学校５年生のバケツ稲作りの部分は「水が育ててくれた恵み」を述べた軽い前書きととらえました。水をコントロールするという言葉がバケツ稲の水の調整のことだったら題名に対して話題がちょっと狭くないでしょうか。

しかし渡邊さんは後半、津波や豪雨、産業発展、経済発展、水をめぐる争いに触れました。そしてそれらのことにこそ、さまざまな形でコントロールが必要なのだと思います。ダム、堤防、水源涵養林、灌漑、上下水道、分水槽など、それらのコントロールについて触れると、もっと題名が生きたはずと惜しまれます。

渡邊さんの作品が素晴らしいのは、単に知ったことや調べたことの羅列にとどまらず、全文に筆者の思いがあふれていることです。達成感、うれしい気持ち、希望を持ち始めた、焦った、おいしかった、あるだろう、考える、などといった語尾にそれが表れています。さまざまな思いの筆者の人柄が表れて初めて文章は生きるのです。